

# 三河アララギ

平成二十二年

六月号

第五十七卷 第六号



## ニューヨーク日記(44) <http://www.copetin.com/blueshoe/>

**BlueCat, Shoe Lady**

Saturday, October 10, 2009

### Blue Shoe Diaries



バスから降りたらお友達のお友達、シェフのピエールがスポーツカーで迎えに来てくれました。そこからまたまた30分ぐらいのところに到着したらこんなに素晴らしいお城が！ShoeLadyニッコリ。このお城がお友達が今働いているレストラン。凄い凄い！

From the train station, we hopped on a bus, then ShoeLady's friend's friend, chef Pierre, picked us up in a sports car. Then another 30 minute drive. And suddenly a gorgeous chateau. This is where we came to visit. This is the restaurant where ShoeLady's friend is working. ShoeLady, big smile.

## 目次

第五十七卷第六号(通卷六七八号)

表紙カット(アーティチョーク) 今泉由利

ニューヨーク日記(44) Blue Shoe(11)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓より」(四)

勿忘草 白井久吉(七)

甘茶をそそぐ 伊藤八重子(九)

偲ぶ 弓谷久子(一二)

小さきままに 清澤範子(一五)

春大根 胃甲節子(一八)

五平餅 佐々木利幸(二二)

葉かげ 堀川勝子(二三)

明時の 小野可南子(二七)

ことよせ (三二)

物理学者と詩歌の世界(五) 一石(三六)

鎌田敬止という人(四十二) 鮫島満(三八)

萬葉一葉(317) 今泉忠芳(四〇)

「氷魚のことから」(113) 岡本八千代(四一)

ことのはスケッチ(378) 今泉由利(四二)

和菓子街道(44) 平松温子(四三)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 (四四)

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

あしたより平たくなりて臥しをればとほしき雨をききてねむりぬ

P  
134

老いの病おなじくやむに亡き父を診たりしよりも十年はやし

P  
134

歌集

一本の木

杉浦

弘

君が好き

ひ ー と り で ひ ー と は う ま れ な  
 い ー ひ と り で ひ ー と は く ら せ な い ー  
 ひ ー と ー の く ら し に ほ し い も の ー  
 い ー つ も え が お ー の お も い や り ー  
 お ー ん だ こ こ ろ ー の き み が す き ー

君が好き

作詞 杉浦 弘  
 作曲 杉浦 道生

ひとりで人は 生まれ  
 ひとりで人は 暮らせ  
 ひとつの暮らした 思  
 いつも笑顔の 思い  
 困ったときは 助け  
 弱ったときは 支え  
 ひとつのころの やさ  
 どんなものにも 換  
 岩間を清水 湧く  
 みんなのため 時を  
 雲ひとつない 大空  
 澄んだころの 君が  
 澄んだころの 君が

## 木曾路

蒲郡 岡本八千代

藤村の「木曾路はすべて山の中」木曾のすべてにけふの春日影

馬籠ゆきバスには友とわれのみよ恵那の残雪しろ白光りしつつ

今もなほ山の清水は音たてて流れくるかな馬籠の坂溝

へとへとなりつつ登る馬籠坂つひに上衣の一枚を脱ぐ

少年の頃の藤村が起居をせし二階にはけふ雛様飾り

京都より江戸へと御幸みゆきたまひたる和宮あはれここ中仙道は

「夜明前」青山半蔵を想ひつつも永昌寺へは参らずにして

せめてもと鳥崎春樹の墓標に詣ず供華花赤し椿の枝の

帰りくれば暮れゆく風にゆれてをり常の処の庭の風草

帰りきて夕べの北窓開けにけりちらちら白し大根の花

勿忘草 わすれなぐさ

新城 白井久吉

神主は脚も崩さず語りつつ玉串作る手許くるはず

無花果の幹食ひあらずカミキリを退治んとして石油を注ぐ

吉祥の山の猪わが里の竹の子さへも食ひあらずらし

喜寿・傘寿・米寿を過ぎてこの度は卒寿迎ふる仕合はせにあり

暖かき日差を受けて咲き薫る勿忘草 わすれなぐさを教へられたり

鯉のぼり風に大きく泳ぐ下黒きアゲハは縫ふごとく飛ぶ

岡崎の御影石にて造りたる白を求むる望みは消えず

もの言へぬ幼子でさへ喜びも悲しみもすぐに顔に表はす

またしてもチリ―地震の報道を聞きつつ思ふ前芝の津波

おもむろに包みを解きて手に執るは卒寿を祝ふ記念の茶吞

アーティチョーク 東京 今泉 由利

どこまでもアーティチョークの畑畑畑の中をサンフランシスコ  
いまはまだ花開く前花蕾アーティチョークの花托をむしり

茄子の苗植えいるところと聞こえきし夕餉に茄子を求むる三個

父母の居ます極楽みとどけぬ車窓に一瞬入覚寺の屋根

大阪へ大阪へと急ぎゆくニューヨークの子の大阪に着く

山々の伊吹の山の山裾に湧きていでくる真白白雲

めちやめちやに光が散乱していると雲のなかのただただ白し

一秒に十兆個私を通過するニュートリノと今日も一日

極楽へゆき着くための計算をしてゐつ午後のオフィスに

太陽系三番目にして岩石の惑星にあり私の住所

## 甘茶をそそぐ

豊川 伊藤八重子

ぎこちなく習ひ始めし茶の稽古少女は自然の所作となりたり

手ぜまなる畑に植ゑし馬鈴薯の発芽を見んと助手席に誘ふ

鯪しやちほこの城と石垣さくら花吾が子に引かれ久に出で来ぬ

春山をすっぽり覆ふ花の傘御津山ざくら古りてはなやぐ

一歩づつ展望台へと登り詰め探す我家は椎の木の蔭

山頂より大島小島見降せば三河のわが海何故か懐し

細き御身花見堂に立ちいます釈迦尼仏に甘茶をそそぐ

本堂にて甘茶を頂き子らを待つ善男善女の賑ふ御寺

汁椀に貝殻開けるあさり貝柔かく甘うまし春の宵膳

遅れ花二つ掲げし紫木蓮若葉萌えたつ梢を凌よぎ

## シーダテープ

豊川 内藤 志げ

カーテンを開けし空はどんよりと鷺の一羽が東に向ふ

何一つ揺るる物なき朝あしたなりたおやかにゆく鷺の一羽が

初めての玉蜀黍のシーダテープ三十糎おきに一粒入りなり

ころころとシーダテープの播種機押す腰を曲げずに玉蜀黍が蒔ける

湿りたる土塊解けぬ畑にも播種機押し押し玉蜀黍を蒔く

一粒入りシーダテープの玉蜀黍は等間隔に緑点々

トンネルの形のままに玉蜀黍野中の風に形ほぐるる

けもの径徑に沿ひ咲く春リンドウ低く愛らし青その青が

鐘鳴らし山に向ひて掌を合はす何祈るなく比丘尼城址に

石ころの急な坂径下り坂杖を突く所を確めながら

## 偲 ぶ

豊川 弓 谷 久 子

うつせみの世にも似しかと古今集の一首桜の花の下にて

八千代先生の西浦の海よと思ひをり桜園地より見下ろす海を

祭礼の昨日濟みしを喜びぬ今朝は冷たき雨降りしづく

我が帽子かむせやりたり入院の介護タクシーに乗り行く姉に

姉の軒に我の飾りし祭礼の軒花空し風にはためく

大人でも子供でも無き十五歳言葉少なくみさとがをりぬ

帰り路は追風ならむ春嵐風に逆らひペダルこぎ行く

御津駅に着きし頃かと帰り来る子を案じをり吹きなぐる雨

ソックスも上着も淡きベージュ色春装はむ風寒けれど

白み来るを今朝も待ちをり暁を覚えず眠りし若き日憶ふ

## 風のある午后

伊丹 青木 玉枝

ラベンダー咲き始めたり紫に香を運ぶ風を待ちをり

大き鉢にゆつたり紫揺れてをりわたしひとりの風のある午后

冬からの花粉やうやくおさまりてマスク外して花吹雪掌に

右に杖左に手提袋てさげとバランスをとりつつ歩むも今は馴れきて

葉の花の黄の広がりの土手に佇ち今日の侘しさここに捨てよう

二度迄もデュエットせし住山先生あまりにも唐突逝きてしまひぬ

わが部屋に君との写真飾りをくあの春の日はなやぎ忘れじ

老いの身に花は心のよりどころ机上にチューリップ一輪挿して

暫らくを友の便りのとだへたり施設に入りしとききて侘しむ

連れ立ちて梅見し友の面影を偲び侘しむ独りの部屋に

## 「インカのめざめ」

豊川 安 藤 和 代

あさまだきまどろみの中鵜に混りて雀の声のやさしき

「行つて来ます」元氣な孫等の声響き吾の心も元氣わきくる

もう二度とハンドル握る嫁は亡く赤き車の車庫に動かず

名と味に憧れあこがれ馬鈴薯の「インカのめざめ」を植うる半畝

浜を吹く風冷たくも潮干狩り孫のバケツに寄居虫もをり

寄り添へる家族のように菜花咲きその紫が大好きな色

夢を持って希望を持ってと言ふように白木蓮は空に真向ふ

中三の孫の進路の説明会若きに混り小さく座る

嫁のいない春の祭りの淋しきを口には出さず客をもてなす

父の忌の巡りて五年咲く桜さくらは私の悲しき花よ

## 霜注意報

岡崎 林 伊 佐 子

霜注意報のニュースを聞きて夜の庭の君子蘭花鉢を軒場に入れぬ

早植ゑの玉蜀黍も馬鈴薯も素枯れしままに四月の晩霜

種蒔きし育苗箱に身重なる蜥蜴が暖とる四月の寒さに

芽生えたる玉蜀黍の苗箱に親に変わりて蜥蜴の子供

異状なる天候異変にスーパーの野菜は高価になりて並べり

秋植ゑのキャベツにレタスに菠薐草うからやからが分け合ひて食ふ

自活用の菜種油とりし遠き日の思ひだされり群れ咲く花に

塩づけにせむ菜の花をけさも摘み紋白蝶を追い出すに似つ

ふる雨に勢ひ出づる竹の子に迂闊につまづく吾が家の竹やぶ

薇も蕨も出づる在処知り籠に摘みゆく春のたまもの

小さきままに

春日井 清澤 範子

低気圧は通り過ぎたり庭にある木犀の若芽吹き散らされて

花散りて葉桜となる日曜日風に吹かれてボンボリはずす

昨夜来風雨は強し庭椿の花皆落しなほも風吹く

移り行くバスの窓から山桜めでつつ病院へ夫と娘と

菜園の蕪菜小さきを残したり小さきままに黄の花咲けり

派手になったと母から貰ひしブローチを着けて病院へのバスに乗り込む

朝市に自転車走らせ開店に一番がけして竹の子三本

赤き萼を踏みしめながら堤防の新緑と変りし桜見上ぐる

繁田川の水はかすかに流れゐる深みに新緑の桜葉写す

穂高より送り来し餅米三合をくるみ餅にと炊きて丸めぬ

導く

島根 金津 文枝

孫は男の三年生なれど若き祖母は料理の手伝をさす

何でも覚えて置けば得と若き祖母は孫に優しく導く

曾孫のミュージカルを県民会館に見つ花束を用意して待つ

機械の餅搗にて今の世に手返しするなく大正生れのわれの見守る

介護福祉学校の餅搗に手返しする久し振りに上手に出来る

何鳥が銜え落ししや山椒の芽銀杏の大きくなるわが庭

宮森の椿大木より落つる花下水に溜まる掃いても掃いても

祖父おほぢちの美声でありき江差し追分テレビに見ゆる思出しつつ

## 米や麦

新城 半田うめ子

東の杉林の中鳥鳴き何に喜ぶしばらくの間を

若き日を父と吾とは広きなる田畑を守りて働き来たりぬ

吾が父は苦しむ人へ米やむぎ渡しても金は貰ふ事のなし

コシヒカリ今年も貰ひし矢部よりの植田先生の作りたる米

特別に味のよくして矢部の米山より流るる水の良きとぞ

いと美味き米にておかゆ作りつつ独りの生活樂しかりけり

若き日の豊川病院働きし友は未婚の美人でありし

わが友は病院に働き老いたるも楽しきと言ひ喜びて勤むる

## 春大根

豊橋 胃 甲 節 子

木末には早々みどりの芽吹きあり吾が桜満開にて今日は安けし

花揺れて風かと仰ぐ窓の外目白の群が花を飛び交ふ

花びらのゆらゆらと舞ふ庭に出で風の出ぬ間に夫の散髪す

「お母さん」と呼ばるる事も無き今は「お母さん」と職人さんに呼ばれ嬉しき

灸すれば頭痛はとれたと喜びし祖母の笑顔を想ひ出だして

俯向けば軽き眩暈に襲はるる春はうるはしされど危ふし

春大根と大きく出でし札を見て買ひ来し大根菜めしとおろしと

宇宙へと行く女性さへ居る感動と癌に生かさるる感謝と寂しさ

生かされて今朝も目覚めぬゆつくりと着替へて寒き今日の始まる

寂しさを言葉に出だす事も無く群咲く射干の淡き色見つむる

## 櫻花

名古屋 近藤 映子

ぼつくと並木の櫻木芽ぶき来ぬ気配はすれど今だ開かず

春雨の晴れたる朝の冷え込みに又コート羽織りて夫を訪ぬる

わが娘多忙の時期の巡り来ぬ年度末なる弥生の末

ちらほらと蕾の開く櫻木を仰ぎつバス停に立てば冷えびえ

レ・フレールドイツ育ちのブギウギのピアノ旋律踊るリズムを

どんよりと雲ゆき分らぬ空模様桜並木はわづかに散り来る

萬葉集何時でも見える書棚の位置を今年も変へる事無し

昼下り夫のベッドに付き添いて左手握手を何時もの様に

暖寒の差の大きさに我体ついてもゆけぬ七十余歳

着きたれば夫の顔拭き口腔内掃除を吾は始めて居たり

## 英語

豊橋 伊与田広子

BSの英語のニュース聞き入るに単語分るも意味分らず

今更に英語を習ふ気にならず老いて忘ること多かりき

老いたれば経験生かし考ふる自分自身の法則立てむ

老いぬれば歩めば人に追越さるあかずたゆまず歩き続けむ

題名の分らずなるも聞き覚えありたるメロデーに心浮き立つ

音楽に合せて踊る映像を見ながらわれは歌稿書くなり

世界にて初めて色着き写真撮りしアルベルカーンテレビにて見る

イタリヤは歌劇に豊と思ひしにカーンは貧しき人達撮りし

朝からの風雨夜に入り強くなりからから音する心配なり

土砂降りにタクシーまでの乗り降りに傘を使ひて忘れて帰る

## 五平餅

豊橋 佐々木利幸

桜の花を撮りに行く今朝は上伊那に降雨の予報を伝へつ居り

二十五年も使ふカメラを携へたり上伊那へ行く撮影実習に

重々しきカメラのザックを背負ひたり喜寿の体力を我は戦きつつ

ステッキも我は携へたり脰の鈍痛を我は耐へなむとして

団子型にせし五平餅を喰ふことを楽しみにして上伊那の旅に

風味がよき桃の産地と聞きて居る我は撮影に来たり座光寺に

幾枚も彼岸桜を我は撮りぬ木曾駒ヶ岳を添景に入れて

聖岳も赤石岳も真向ひに今日は見上げたりカメラ携へて

山桜を撮りにきぬ大久保に見たり耕作を放棄せし田居

日課とする五千歩を我は歩きたり彼岸桜を撮る撮影実習に

## 伝 授

蒲 郡 杉 浦 恵 美 子

桜見の人ひとひとの人波に逆らひ歩める隅田川土手

いにしへの渡船偲べる隅田川上り下りは今も賑はふ

夫不在ひとつ弁当箱洗ひ居り忙しさひと息新学期の夕

天窓に葉桜始めの梢見ゆマツトに仰向けストレッチ教室

現代文の勉強法我が伝授せば食ひ入るやうに生徒等聴き居り

夕闇に紛れて聞こゆ生徒等が部活終りて下校して行く

用例に御神酒と云へば御神籤と生徒応じぬ美称の接頭語

即応の生徒の返答嬉しくて幾度誉めたり古典の授業

口癖に私が死んだらどうなるの母言ひたりきどうにかやつてる

母居らばさぞ喜ばむ早春の京漬物屋菜の花浅漬

## 葉かげ

豊川 堀川 勝子

新緑の葉かげに楚楚とほの白し我が庭桜のおしまひの花

葉がくれに楚楚とはかなく咲きてゐる明日は散るらし余花の花は

オリオンを吾と幼と競ひつつ探しあぐねし若き日もあり

プラネタリウムに星座オーロラ眺めゐて不意に睡魔に襲はれにけり

蜜柑の出荷た易く済みて足らひつつ家族の数だけナス苗買ひぬ

出荷終へ蜜柑の匂ふ空箱を塞ぎてトマトの小苗の緑

明け初むる空に響きぬ炸裂音祭りの日とて親しげに聞く

四十二歳の本厄災の祭り日なり吾子の平安の思ひは消えず

知らぬ間に新撰組の仮装して闊歩してゐし吾が目の前を

記念写真に収まる吾子は夫よりも幾らか背丈高くさへ見ゆ

## 指令

東京 北川 宏 廼

いいホームを見つけてくれてありがとう同じ言葉を繰り返す母

俺にはなお前しかないないさりながらお前さんにはそれ言はないよ

愛といふことばは僕には馴染まないポケットの中の君の温もり

女房のメモの指令に従ひつつデパ地下にて買ふ夕餉のおかず

右岸より左岸の春が早く来て見頃となりたる芹川せりかわの桜

単線の電車しずかに春の畑はた耕すように近江線がゆく

長々とつながりてゆく貨物列車の隙間に見ゆる琵琶湖の湖面

顔洗ひ頬ひたと打ち連載を書き始めむと机に向かふ

グーグルにて地球をぐるぐる回る回りをれば普天間移設阻止デモの中

地球人が皆中流にならむには地球の資源は少な過ぎる

## 花の台

豊川 平松 裕子

西空に輝く星の一つあり帰りてゆかむ光の方へ

歩く道にも座るベンチにも赤茶けた桜の台に埋れゐる公園

赤茶色の花の台を集めゐる幼にこれも桜なのよと

赤茶色の花の台を踏み踏みて幼二人が我が前をゆく

我が庭のうの花一枝玄関に活くるは楽し初めて咲きぬ

玄関の広場のタイルに我が影の映りて髪の乱れをなをす

先生の功績の展示に止まりてしばし遅刻を忘れてゐたり

白髪のひとつ幾人か座りゐるいますはずなきスエ先生探す

白髪のスエ先生の姿探す覚めれば空しほの暗き中

ごま和へのセリを喜ぶ今日の夫亡き母祖母を偲びゐるらし

## 一部始終

豊川 山口千恵子

羽音たて抗へる蠅を土蜘蛛は無理矢理穴に引き入るるところ

からめとりし黒バエ巢穴に引き込めるハエとクモとの一部始終

ボンネットの花弁飛ばし暫し走るわが家の桜遠く舞ひゆく

花卉も萼もやがて土に還る散り敷く上をわが行き来する

花の季はや過ぎたるか佐奈川桜下流の水面に花筏累々

わが庭にひととき啼き立て去りにけり確かな声に今年の鶯

今年また青々萌えくる草々よ絶ゆることなき杉菜抜きゐる

杉菜の根掘りたる土の中より出づ戻りし寒さに動かぬ蛙

書き込みのしてある孫の教科書に再び読まむ走れメロス

五十年たち再び読む走れメロス人のところは難しきもの

## 明時の

豊川 小野可南子

明時のしらみゆく時ダミ声に鳴き渡りゆく嘴細鴉

のつたりと白く広がる今朝の海空との境おぼろおぼろに

大輪の真紅のバラも古りふりてその太幹に棘は失せたり

翻りひるがへりしてツバクラメ白曇る日の佐奈川のうへ

訪ねこし門の砌に柿若葉春の嵐にちぎれしみどり

吹く風をはらみて楓の新緑よ病みいます君の今日を思ひぬ

雨あがる風吹きはじめ陽が射しぬ繰返すばかりの四月の空は

アスファルトにくつきり私の影歩く久しき思ひその黒き影

佐脇原を雉子の一羽が駆けぬける草むらまでのその一瞬を

佐奈川に架れる橋を雉子のゆく渡りきるまでの足音ひびく

八十字治川  
豊川 夏目勝弘

平成に成りし大橋の橋脚にいざよふなみなし渦まく流れ

髪長き女が一人釣りをする網代木あじろきのなき宇治川の流れ

遊楽の人ひと人の人の波表参道新茶の薫り

ひたすらに平等院を目差す人人波横切り宇治川堤

宇治川の堤は葉桜川風に汗おさまりぬ早き昼飯

人麻呂の無情感など思ひつつ人混み逃れ下流の岸边

宇治川に影する白サギ動かざり影乱るるはいざよふ波か

その疾さ矢のごとしと道登が大化二年に橋を成したり

人麻呂も渡りしならむもののふの八十字治川と流れの上を

都人また人麻呂も恋ひし大湖無情をうちに宇治川の渡り

遊楽の八十人やそびと行きゆく宇治の地を早ばや逃れ奈良線の電車

「招待」

真夜中に

東京 秋山 逸穂

万年筆のインクのきるとき文字毛筆のごとき味わいはなし  
火鉢の火うすずみ色の灰まといさしだす手のひらあたためている  
粗壁の亀裂のうえに木槌打つ崩れゆくとき生臭きにおい  
辞書をひき推敲つづくる真夜中に小腹すきたり餅でも焼こう  
ホーホキヨと一文字抜いたうぐいすの鳴く声渡る新緑の山

花卉

東京 井村 喬泉

病院の廊下をあるくスリッパのただの白さに不吉さにじむ  
よごるれば鱗じみたり道端の溝を桜の花卉が遊ぶ  
白線の止まれる止の字を消して乳色の花が降り積もりたり  
春風にあたためられてゆるびしは花のみならず仔犬も我も  
壁面に花卉をこする蒲公英に風は自責の念をうながす

## 私の一首

おほ母の押しゆく乳母車に従きゆきし何処に行きしか今はわからず 山口千恵子

身近な人がつぎつぎに逝ってしまい、昔を偲んで話をするともなくなってしまうた。

祖母のことを思い出すたび懐かしさと、何でもない小さな記憶が蘇る。

乳母車には幼い弟が乗っていたのか、荷物が乗っていたのか。その脇をスキップしながら幼ない女の子だった私がついて行く。隣り町の叔母の家へか、或はお寺参りにでも行ったのだろうか。子どもの頃の小さな思い出の一首。

岐阜に住む孫より相手の紹介の電話のありて自然に笑顔 石黒スエ

年頃になる孫を心配して相手を紹介しようとしても耳をかたむけずなかばあきらめていました。すると突然相手のある事話を話してくれる電話がありました。受話器を持ったまま笑顔になりてお目出度うと声をかけました。嬉しい気分にて記念に一首残してみようと思つて作ってみました。孫に見せたら悪い気持ではないらしく笑顔でよんでいました。

久々に雨の降りたり春の雨庭の草木の蘇るなり 伊与田広子

前の年の秋頃より雨が少く、その柿の落葉が早く、柿の実も、実る頃になって殆んど落ちてしまいました。年が明けても雪も殆んどなく、朝溝の辺りが少し濡れてをり夜少し降り融けてしまったのではないかと思われる程度でした。ところが、二月に入つて、雨が降り出し恵と喜びました。砂漠のようになつていた庭にも恵の雨が降り芽を出そうとしていた草木にとつては天の恵の雨であると思ひそれを詠んだ歌であります。

## 新藁の円の注連縄清々と門に掲げて年あらたまる

伊藤八重子

糎り穂の少しついでいる青味がかつた新藁で、先生が縋って下さった圓の注連縄を正月を迎へる我家に掲げました。金紙と紅白水引でしかと結び半紙の四手を垂らした、如何にも手づくりの味のするすっきりした注連縄でした。飾り物無し  
の清潔さは元旦の清氣と古びた我家の門によくマッチしてよい新年を迎へることが出来ました。

## 冴ざえとブルームーンの明るさに千尋と肩をふれつつ今宵

小野可南子

孫の千尋が一人で私のもとに泊りに来た。その夜は満月であった、それもブルームーンこの二月の月に二度目の満月、千尋を誘つて庭に立った。冴えかえる月の光の中に二人の肩が触れあうのです。もうじき祖母である私を追いこすであろう小学二年生の千尋の成長が頼もしく、嬉しい一夜でした。

## 「あめゆじゅとてちてけんじゃ」思い出づ解けゆく白き光りの雪に

岡本八千代

寒が明けてからの朝、雪の雫の音がしている。昨夜積つた雪が朝の光りに解けはじめ、ピニールの廂に伝わり落ちて音がしている。

この時、ふと思ひ出したのは、宮沢賢治の詩「永訣の朝」の中のことは「あめゆじゅとてちてけんじゃ」であった。賢治の最愛の妹が死にそうな時に兄の賢治に頼んだことは、「あのゆきをとつてきてください」と、一椀の白い雪を所望した、永遠の別れの悲しい、美しいことを私は歌いたかった。その一首。

『いじよみせ』

「俳句」

とつときの話をしよう夜の桜

植村公女

晩節のひと日は暮るるや柿若葉

母と児の声音やはらか姫女苑

若き日の愚かさ恥じて土筆摘む

一石

芽起こしの雨と謂ふからなほ愉し

生命のこぼれるやふな季節ときにあり

残雪や漱石修行の禅の堂

佐藤喜仙

修行僧素足に下駄や春寒し

梅咲くや在家修行の坐禅堂

葉桜の蕊に紅ありうつくしい

皓一

生え出てまもなき若葉に風のあり

(西浦公民館いーはとぶ)

花冷えの日比谷の桜見上げたり息子夫婦とわれの三人

吉見幸子

白砂の浜の続きのごとくして妙善寺といふ寺の門前

牧原正枝

幡豆港をかぼちや寺よりながめたりけふの四温のおだやかなる波

岩瀬信子

線香を供ふるさへも姦しく観音詣でのわれら八人

三田美奈子

夕暮れのベランダ高きより眺めをり愛宕の桜の花花あかり

稲吉友江

かぼちや寺に何をか祈らむわがことは胸にしまひてただ掌を合はす

鈴木美耶子

投稿

豊川 白井信昭

真向かえる春の陽射しを受けて待つ信号変はるまでの温もり

見慣れゐる御津山景色今日よりは雪洞灯る明るく灯る

贈呈誌 (四月号)

「秋田アララギ」

大山トキ子

雪原に黒土見えるひとところ白鳥の群が一斉に下りぬ

「群山」

相澤寿美子

「秋楡」

春日井英子

さえずりし子雀三羽軒下に冬陽うつろいたたずむ吾は

「穂の原」

田中浄子

「愛媛アララギ」

村上由紀子

海沿いのなだりの畑に放置せしみかんに雪舞う一月半ば

母と摘みし野草の香りをたまらなく味ひたくて寒き野に出づ

大谷登美子

「鹿児島アララギ」

月精 薫

連なれる国見の山脈夕やけて堤防歩む吾が影長し

お花見にて酒を交し騒ぐ人セニヤカーにて見ながら通る

鈴木せつ

「高知アララギ」

種田恵美子

むらさきの風呂の煙は隣り家の空に溶けゆくこの午後の時

「歌集」 街灯

小林芳枝

「滋賀アララギ」

佐本三恵子

小屋隅に冬瓜南瓜転がりて食べるなくして春の近づく

庭のなき暮らしに慣れて四階のベランダに置く幾十の鉢

仕事場より出でくる父が歩くとき畳に散りき象牙の粉は

細りたる茎たちあがるシクラメンに今年最後の花咲かむとす

ほんの少しの物に反応する腸となりてゴロゴログルグルと鳴る

「冬雷」

白川道子

目を閉ぢて明るむ方に向かひをり梅の香りか微かなれども

押し黙る夫と帰る夜の道ときをり影はあはくかさなる

校正を終へたる眼やすませて蓮河に沈む日をとほく見る

「灯」

萱場幸子

一筋のバイクの明り射し入りて新聞配達足音近づく

寅さんの近くと言へば分かるかな東京下町わが住む辺り

「椋」

原愛子

降ろしたる屋根雪たかく登園の子らの姿のすぐ隠れたり

「リゲル」

矢田崇子

裸木になりて聳ゆる椋の木の向かうに細き三日月の冴ゆ

山崎光子

## 物理学者と詩歌の世界 (5)

一石

今回の主役湯浅年子(1909-1980)は日本で最初の国際的な女性核物理学者。まだ多くの帝国大学が女子に門戸を開いていなかった昭和初期に物理学を志し、第2次大戦勃発直後の1940年フランスへ留学し、コレジ・ド・フランス原子核物理・化学研究所にてフレデリック・ジョリオ・キュリー(1900-1958)の下で研究に従事した(参考文献1)。

キュリー一族はフランスの華麗なる科学者の家系として名高い。ポーランド出身の物理学者・化学者マリア・スクウォドフスカ・キュリー(1867-1934、マリ・キュリー)は、一般にはキュリー夫人として有名であろう。マリア・スクウォドフスカ・キュリーは夫のピエール・キュリーと協力して放射性物質の研究を行い、ラジウム・ポロニウムを発見(1898)、またラジウムの分離に成功(1902)、1903年に夫婦でノーベル物理学賞を受賞した。夫ピエールは1906年に不慮の交通事故により亡くなったが、彼女はその後1911年に単独でノーベル化学賞を受賞。娘のイレエヌ・ジョリオ・キュリー(1897-1956)も原子物理学者。1935年、「人工放射性元素の研究」で、夫フレデリック・ジョリオ(1900-1958)と共にノーベル化学賞を受賞した。

湯浅年子が師事したのはこのフレデリック・ジョリオ・キュリーである。彼女は1931年東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)理科、1934年東京文理科大学物理学科を卒業。1945年終戦直前に帰国し、母校女高師の教授となる。1949年、ジョリオ・キュリーとの共同研究のために再び渡仏し、彼の地で生涯を閉じた。研究

分野は実験核物理であったが、文芸にも秀で短歌や随筆も多く残した。著書に『パリ随想』、『続・パリ随想』、『パリ随想3』、(みすず書房、1977、1981)ほかがある。異国での長年に渡るひたむきな研究の重みが美しく結晶し、詩情をたたえた文章は感動的でさえある。

異文化の地、しかも強い個性をもつ研究者の中にあつて日本人としてのアイデンティティを固持するには、彼女にとっては短歌という表現手段がなくてはならないものであつた。彼女のそばには短歌が常にあり、日記には多くの短歌が残されていた(参考文献2)。以下に湯浅の短歌3首をあげる。

○地層より伝ひ来る冷えを感じつつあかつき一人森を歩めり

○天地ゆ吾れ孤なりゆくりなくたつ夕つ野にきんぼうげ咲き

○夜を徹し重き轍(わだち)の音びきかりそめならぬいくさ迫りぬ

ナチ占領下の研究生生活は苦難と波乱に満ちていた。風雲急をうげな格的戦闘が迫っている様を詠んだもの。この後連合軍によってパリは開放されたが、市街戦が起こり敵国人であるがゆえに湯浅はパリを脱出、ベルリンを経て帰国している。

### 参考文献

- 1) 『湯浅年子博士の科学と人生―パリに生き、真実を求め続けた物理学者の軌跡―』、山崎美和恵、ジェンダー研究、第4号(2001)
- 2) 『パリに生きた科学者湯浅年子』、山崎美和恵著、岩波ジュニア文庫

## 一首鑑賞

鮫島 満

人が人を裁くより他なくあやまてる三十四年を人はかへさず

御津磯夫『月下の華』（白玉書房）

作者はアララギで斎藤茂吉、土屋文明に師事、のちに「三河アララギ」を創刊・主宰した。

右の一首は昭和五十八年の作。下句の「三十四年を人はかへさず」から逆算すると、昭和二十三年に起きた折袴師夫婦殺害、現金強奪の罪で翌年に犯人とされた免田栄さんが逮捕された（免田事件）を詠んだものであることがわかる。

免田事件の、逮捕から無罪判決までの流れをもの本でたどると次のとおりである。

昭和二十四年 免田栄（当時二十三歳）別件で逮捕される

昭和二十五年 熊本地裁八代支部で死刑判決言い渡される

昭和二十六年 福岡高裁、免田の控訴を棄却する

昭和二十七年 最高裁、上告を棄却して死刑確定を言い渡す

昭和五十四年 六回目の再審請求が承認され、死刑囚初の再審が開  
始される

昭和五十八年 最高裁で無罪判決言い渡される

この判決をきっかけに「財田川」「松山」「島田」の各事件が再審で死刑囚の無罪判決が相次いだ。

掲出歌は、罪を裁くのは人によるほかはなく人が人を裁く以上は常に冤罪の危惧を免れ得ないという真理を踏まえたとえて、この度の事件では無実の人を三十四年も罪人として拘束、その人生を奪ったが、「人」はこの三十四年を償うことは決して出来ないのだという怖ろしい真実を詠んでいる。作者が「人」というとき、司法という国家権力に委ねる外ないすべての人間を意味しているだろう。もしここに怒りを感じるとすればそれは他人に対してではない。

「人が人を裁く」というとき思わずにいられないのは平成二十一年五月から始まった裁判員制度である。裁判員が担当する項目には、「死刑又は無期の懲役・禁錮に当たる罪に関する事件」があるから裁判員になった人の多くが苦しんでいるのは当然だろう。誤判で思い出すのは、十七年間の拘束の果てに無罪が確定（平成二十二年三月）した（足利事件）の菅家利和さんのことである。そしてまた名張毒ブドウ酒事件の行方が話題になっている。

掲出歌に戻るが、これは無罪判決が確定した直後に詠んだ時事詠である。事件名も人名も詠み込まずに、事件と作者との関係に何らかの抒情を必須とする

時事詠のあり方を実践している点で手本にすべきみことな作品である。最近の時事詠が、事件を即物的になぞったり自分の主張を性急に主張することに終始したりしていることを思うとその感はいっそう強くなるのである。

〔月虹〕73号転載）

## 鎌田敬止という人（四十二）

「月虹」 鮫島 満

### 青磁社時代

#### 〈高村光太郎との交流（4）〉

おてがミと検印紙届きました。札幌青磁社は独立経営といふ事ですが、「道程」はどこで責任を持つて出すのでせう。札幌でせうか、東京でせうか。なぜ東京青磁社から検印紙が来るのでせう。札幌からは何とも言つてまゐりませんから、問合せから捺印のつもりです。五千部ときいてゐましたのになぜ一万も入用なのでせう。又申あげます。

（昭和二十二年六月十四日付）

この、光太郎からの問い合わせに対して鎌田は次のような返事を書いています。

「道程」は札幌青磁社の責任出版でして本来ならば札幌から検印票お送りすべきであります、検印紙が品切れになつたかして突然電報で「ドウテイケンイン一〇一〇〇テハイタノム」と言つて来ましたため当方よりお願ひ申上げたのでした。御不審なのは如何にも御尤なことで、札幌より御連絡を怠りましたことが一番いけないこと

でした。（略）もともと「道程」は先生から私が戴いたもの、勿論東京の青磁社から出版すべき筈でありましたが、米岡君が是非札幌で出させて欲しいとたつての頼みでしたから昨秋山口へお伺ひした時にも御諒解を戴いたのでした。私のつもりでは「道程」は一版だけ札幌で出してそのあとは白玉書房へ申受ける考へてゐます。（略）札幌の責任出版とはいへ始終の事に私個人も責任があります訣で、（略）ともかく私からも嚴重に言つてやりますから、何卒あしからず思召し願ひます。

（昭和二十二年六月十六日付）

右に「白玉書房」云々とあるのは、この年のうちに鎌田が設立する予定の出版社である。鎌田の厳しい意見もあつて札幌青磁社では直接の説明が必要であるとの判断をしたらしい。それは光太郎の、「十時頃更科源藏君、真壁仁君同道来訪。『道程』の事などで来訪の由、検印紙の事など事情を話さる。装幀見本も見せられる。結局検印紙と印とを更科氏に渡す。捺印してもらふ事。印は青磁社へかきぬ事など注意す。」（昭和二十二年六月二十八日）からの推定である。札幌青磁社では『道程復元版』のお蔵入りまで心配したかとも思われる。

更科、真壁の二人が訪ねてきたことは七月二日付の宮崎稔宛はがきにも「此間『道程復元版』の事で更科君と真壁君と同道で来られました。」とある。こうして光太郎にとつて不満の残ることながらも一応の解決をみたことは次に示す光太郎から鎌田へのはがきによつてわか

る。

「道程」復元版の検印紙の事についておてがミ拝見いたしました。札幌青磁社から数日前更科君が来訪、一切更科君にまかせる事にし、て印も同君がおしてくれる事になりました。

(昭和二十二年七月一日付)

これに対して、鎌田もまた光太郎に重ねて謝罪の手紙を次のように書いている。

「道程」の検印の事お手数おかけ致しまして申訳ありませんでした。更科氏がお伺ひした由で私も安心いたしましたが始めつからさう云つてくれればよかつたと思ひます。金版を東京から作つて送りましたが急がせたのであんまりいい出来とは言へませんが、検印を言つて来てから程経て金版の注文をしてくるなど、文化祭のたたりか、ものごとの運び方が前後してゐるので驚いたやうな次第でした。

(昭和二十二年七月二十四日付)

こうして世に出ることになった『道程』復元版は、しかし、更科に細かく指示を与えたにもかかわらず、また、装幀見本を見たにもかかわらず満足いくものではなかつた。一応担当者の更科には「印刷きれいです。」(昭和二十二年七月三十一日付はがき)と書くものの、同

日に出した鎌田へのはがきには「今日の事情ではこれでよいとせねばなりませんまいが、針金綴には一寸弱りました。」と苦情を漏らしている。この不満はこの数日後に宮崎稔に出したはがきにも「『道程復元版が出来ましたが、急ぐにも及ばないのでまだ送りません。針金綴でよくありません。』(八月三日付)」と書いている。「まだ送りません」の一言に光太郎の悔しさがにじんでいると言えよう。光太郎の青磁社への不満は印税がすぐには払われないことによつても継続する。同年十月二日付宮崎稔宛のはがきに光太郎は「札幌青磁社は四苦八苦といふ事で『道程』の印税もまだ来ません。」と書いている。しかしその一ヶ月後に印税が送られてきたことが日記に「札幌青磁社より道程印税約半額」と記されている。このことは翌十一月三日付更科へのはがきにも「おてがミ昨日落手、小切手おうけとりしました。貴下が青磁社に居る以上、青磁社に対する信用を失ひません。」と書き、また、「今は出版社はどこでも相当に苦しんであるやうですが、(略)。著者に気の毒な思をさせる出版社は長続きしません。小生としては貴下が青磁社に居る事ですから、すべて信用してゐます。(略)本の出来はやはり北海道ではまだ整備が揃はないと見えて印刷製本等十分とはゆきませんでしたが、用紙が中々いいので、今日としては不足もいへないと思ひます。」(昭和二十二年十一月四日付)とも書いている。

ここには更科への絶対的な信頼が述べられているわけであるが、時に見え隠れする青磁社への不信が決して鎌田へ向けられたものでないことは以下に随時紹介する書簡や日記などで明らかにする。

# 萬葉一葉 (317)

今泉忠芳

磐姫その十九 灘波天皇妹

難波天皇妹奉上山跡皇兄御歌一首

一日社 人母待吉 長気乎 如此耳待者 有不得勝 (卷第四・484)

難波天皇の妹、大和に在す皇兄に奉り上ぐる御歌一首

一日こそ 人も待ちよき 長き日を かくのみ待たば ありかつまじじ

○一日だけなら待つていられるけれど、長い日数を待つてばかりはいられません。

長気乎 長き日を まじじ できない だろう

日をケと読む。表記には気が用いられている。日は一日の場合、日は日の複数。磐姫の歌 (卷第二・90) にも「君之行 気長久成奴」とある。気||日は複数の日のことである。

難波天皇は 仁徳天皇である。

難波天皇妹は 八田皇女と思われる。

卷第二の巻頭は磐姫皇后の歌、卷第三の挽歌の最初は聖徳太子の歌、卷第四の巻頭は灘波天皇妹の歌、時代の古い順に歌が並べられている。従つて本項の難波天皇は灘波高津宮の仁徳天皇とみてよい。灘波天皇の妹は八田皇女となる。磐姫皇后の留守に仁徳天皇は八田皇女を妃として入内させたため、磐姫皇后は灘波の宮に帰らず、山城の筒城宮に籠られた。仁徳天皇は筒城宮に磐姫皇后を訪ねて行かれた。日本書紀では天皇は皇后に会うことはできなかつたと記されている。

八田皇女は仁徳天皇の異母妹に当る。

仁徳天皇の父、應神天皇には十名の妃があり、二十六名の子を数える (古事記)。(記述を計算すると二十八名である。)

高城入姫 五名内一名大山守皇子

姉妹 中比売 (皇后) 三名内一名大鷦鷯天皇

弟比売 五名

宮主宅姫 三名 宇遲若郎子

姉妹 八田皇女

袁那弁郎女一名 雌鳥皇女

弟姫 一名 宇遲若郎女

糸姫 一名 隼総別皇子

長姫 三名

迦具漏比売五名

伊呂比売 一名

## 八田皇女の歌

一日こそ人も待ちよき長き日をかくのみ待たばありかつまじじ

磐姫皇后の歌

君が行日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

二人の歌は仁徳天皇の旅による不在において、天皇の帰りを待つ歌である。八田皇女―長き日を待つ、磐姫皇后―日長くなりぬ：待ちにか待たむ。

日本書紀では磐姫皇后没後、八田皇女が皇后になっている。

三十五年夏六月、皇后磐之姬命は筒城宮でなくなられた。

三十八年春一月、天皇は八田皇女を立てて皇后とされた。

## 「氷魚」のことから (113) 岡本八千代

前回の「風流仏」の主人公珠運と花漬け売りの女、お辰のあらずしは、日本文学史(12) 近代・現代篇3・ドナルドキーン著、徳岡孝夫訳を参考にして書いた。そのつづきもそのように書いてゆく。

「珠運(仏師)は、お辰を助けて須原をあとにしたが、いつもお辰のことを想って、そのおもかげが浮かんで消えない。彼はまもなく病気になってしまふ。

主人(宿の)とお辰が駆けつけてきて、珠運を須原へ連れ戻す。——全快した彼は、はじめて恋を打ち明け、二人は結婚する。

ところが今夜は婚礼という日に、長い間生き別れのお辰の父親が東京から使者を寄越して、否応なしにお辰を連れていってしまふ。

父親は維新の戦乱で功を立て、大使に従って洋行し、その才を見込まれて華族の養子になり、いまは子爵にまで出世した。多忙にまぎれて手紙一本書かなかったが、心では妻子を忘れてはいなかった。彼は、ようようお辰の居場所をつきとめたのだ。

お辰が連れ去られたのを知った珠運は、悲しみに取り乱す。かつお辰が縛られていた家を細工部屋にしてもった珠運は、お辰の生き姿に似せて観音像を彫るのであった。はじめは花衣はなえももを着せていたのを、やがて、一輪の花を削り二輪削り、とうとう裸身の観音を

仕上げたのであった。

手製の影法師に恋いがれている珠運に宿の主人は、新聞を見せる。お辰は子爵令嬢となり、某侯爵との結婚の近いことが奉じられていた。

珠運が仏像に向かつて恨みのたけを並べると、観音像は魂の入ったお辰になって恋のまことをかきくどくのであった。錯乱した珠運は、鉦を取って仏像を打ちくだこうとするが、像の裸身はみずみずしく、鉦を当てれば熱い血がほとばしりそうな気がしてそれもできない。珠運は鉦を取り落し、床に泣き伏す。——その時、『天より出でしか地より湧しか』あたたかい腕が伸びて頸筋くびすじにからまる。

珠運とお辰は手を携えて天に昇る。あとには白バラの香が残る。」これが露伴の作品「風流仏」である。「明治22年(一八八九年)に出版した。

子規の「月の都」の直人とお波、露伴の「風流仏」の珠運とお辰、それぞれの情熱的なロマンチックな物語は、やっぱり似通っている。どちらも虚と実の構造がうまく取り合わさって、そのわざとらしい天界に昇る主人公たちの様相も、当時としてはむしろ美しい幻想として描かれたような気がする。

とくに「風流佛」の文体は「西鶴調の地の文と様式化された口語の会話部の合成されたもの」といわれ、わかり易さもあつたと思う。

## ことのはスケッチ(378) 今泉由利

### 『レディー・ガガ』

「今、ニューヨーク、飛行機に乗るところー神戸アリーナで二回、あと横浜のアリーナで二回、「レディー・ガガ」の講演をするから。はじめに大阪に着くの。忙しくてなかなか会えないから大阪まで来てね」とは玉由。

突然こういうことになるのは慣れている。

ただちに新幹線に乗った。大阪の、玉由が泊るはずのホテルで待つことにする。

「今、関空に着いた」「リムジンに乗ったからまだ一時間ほどかかるよ」「日本で使う携帯が壊れちゃったから、ニューヨークの方の番号に掛けてね」。お互い日本に居ながらニューヨーク経由の電波で話をする。

「レディー・ガガ」。しばらくその名前は身近にあっただけれど、インターネットで検索してみると物凄い経歴がでてきた。

アメリカのレコーディング・アーティスト。二〇〇八年発売のデビュー・アルバム「ザ・フェイム」は大成功を収め、アメリカはもちろん、アメリカ以外の国でも、音楽チャートで一位を獲得。「ビルボード」のダンス/エレクトロニカ・アルバム・チャートで一位。

第五十一回グラミー賞、最優秀ダンスレコーディング賞にノミネート。

二〇〇九年、二枚目のアルバム「ザ・モンスター」を発表。「タイム」の世界でも影響力のある有名人「タイム一〇〇」のアーティスト部

門の一位に選ばれている。

ニューヨーク州の実業家の家に生まれ、四歳の頃には楽譜なしでピアノ演奏ができ、十三歳ではピアノのバラードを作曲した。十七歳で、ニューヨーク大学の超難しい芸術学部に入学。本格的に音楽を学び、作詩、作曲技術を得。十九歳で親元を離れ、ストリップバーなどで生計をたてたりした型破りに、称賛を受け続ける。

そのうえに慈善事業にも大きく関与を続けている。

こんなに素晴らしい、大胆、最先端、四次元といわず五次元みたいな世界の人と玉由が関わる。

横浜アリーナの「ザ・モンスター」THE・MONSTER・BALL・TOUR<sup>®</sup>にゆく。

横浜の方向へ向くと、この公演に馳せる若い子達が、ガガに近付きたいファッションでぞろぞろ、えらいことになっていた。

チケットはすでに完売なのに、チケットを求める列が会場を取り巻いていた。

ざっしり満員のアリーナの観客総立ち、ネオンライトと共に、「レディー・ガガ」に反応、ゴーと轟く歓声と、これ以上の拡大音はないだろう大音響で、身体的全細胞が痺れる。空気ごと。建物ごと。

舞台装置など飛行機二機をチャーターして運んだのだという。

バックダンサー、スタッフ、ボディガード：「レディー・ガガ」のショーを支える人達九十六人、アメリカからやってきたそうだ。

四次元の奥ゆき、新しい素材の衣装、ダンス、ほとんど裸、足まで使ったピアノを弾いてしまう。

驚きと、面白さと、私の新しい部分加わるのだった。

## 和菓子街道 (44)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

二川の次なる宿場は、現在の豊橋の中心部に当たる吉田宿だ。遊郭や旅籠が立ち並ぶ賑やかな町だったようだ。吉田は城下町でもあったが、城の御用菓子屋が今も商いを続けている。藩に精糖を命じられ、呉服屋から菓子屋に転身した絹与だ。

江戸期の絹与名物は「玉霰」。本紅で真っ赤に染めた小粒の砂糖菓子で、口に含むと舌や唾液が真っ赤になった。歌舞伎役者も絹与の玉霰を口に含んで舞台に立ち、口から血のりを垂らす演技をしたのだとか。玉霰は吉田藩主や有栖川宮家、鷹司宮家、参勤交代の諸大名などに献上されたそう。

今では玉霰は作られておらず、絹与の名物は家伝の羊羹になっている。竈に薪をくべてるところから始まり、全て家内で手



和三盆糖入りのコクのある3種と、氷砂糖を使ったさっぱりとした3種がある。

◆絹与

住所：愛知県豊橋市呉服町61

電話：0532-52-4149

作りしている。

絹与を知ったのは東海道を歩いてから。今では由緒正しく、古式を守る故郷の菓子屋のことを各地で自慢して歩いている。

## お知らせ

▽編集会は、六月十三日(第二日曜日)に発行所にて行う。  
▽七月号原稿は、六月一日(火)までに必着、郵送のこと。

## 歌詞の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 六月御津山吟行歌会について

日時 六月二十七日(第四日曜日)  
午前十一時

集会場所 御津駅・または呑龍  
会費 三千円

※出欠の返信が出してない人は、六月十日までにお送り下さい。

## 編集後記

△五月の青空のもと新緑のみどりが目に沁みる季節となりました。

去る四月二十九日、蒲郡市民会館にて、第二十五回蒲郡俊成短歌大会が「歌に詠まれしもの」短歌は時をも越えて「」のテーマの短歌大会と併せて企画展が催されていた。

三河アララギも大きなスペースで紹介・展示をしていただいた。

御津先生のお歌「かたくなに写生の一語守りきて六十年のつひに楽しむ」に始まる短歌にうち込まれた先生の一生が、色紙・色紙集・歌集・随筆・研究書等多数が展示され、現在の三河アララギに至るまで写生を第一とする姿勢が紹介されておりました。

三河アララギの一員であることが誇らしく、嬉しく、改めて短歌を続けてきて良かった、そしてこれからも、との意を強くしました。

(小野)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年五月二十五日印刷 第五十七巻 第六号  
平成二十二年六月一日発行 定価 六百元

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘  
平松 裕子・山口千恵子

### 発行人

今泉由利

三河アララギ会

### 発行所

三河アララギ発行所 〒四四一・〇三二一  
豊川市御津町御馬西三七

T E L (〇五三)七五・二〇〇九  
振替口座 〇〇八三〇・六一五六三九

### URL

E-mail yurii88@cronos.ocn.ne.jp  
Homepage <http://www.uconn.ne.jp/~yurindex.html>

### 印刷所

株式会社 桜創美